



研究者名※	安藤朗子	学位※	家政学修士(児童学)
所属※	家政学部 児童学科	職名※	准教授
連絡先	andoa@fc.jwu.ac.jp		
URL			
researchmap※	https://researchmap.jp/7000017214		
研究分野※	子ども学		
研究キーワード※	発達・子育て		
共同研究・競争的資金等の研究課題	・乳幼児の身体発育及び健康度に関する調査実施方法及び評価に関する研究(厚生労働行政推進調査事業費補助金(成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業(健やか次世代育成総合研究授業))研究協力者 2018~2022)		
社会貢献・産学官連携活動等			
受賞歴			

研究領域	子ども学 発達・子育て 発達臨床心理学	
研究テーマ※	極低出生体重児の発達および支援に関する研究	
概要※ (概ね1000字以内) (写真・グラフ等自由)	<p>【研究の背景・目的・内容】</p> <p>日本では、出生率の低下が深刻な社会問題となっている一方で、低出生体重児の出生率は、1980年代から増加傾向にあり、2005年頃から9%台中盤で横ばい状態が続いている。また、医療の進歩により、出生体重1500g未満の極低出生体重児の出生率も同様に増加してきている。しかし、日本における極低出生体重児の発達過程等についての実証的データは少ないため、全国周産期ネットワークにおける一施設で1997年度より極低出生体重児の発達研究を行ってきた。2016年度からは、個別事例への臨床相談支援を行っている。</p> <p>主な研究内容は、修正1歳6ヶ月、3歳、6歳、9歳、14歳の時点での発達状況について、発達(知能)検査や質問紙調査、保護者や子どもに関わる多職種からの情報収集等によって縦断的データを収集し、分析を行ってきた。その結果、極低出生体重児は、心身ともに乳児期前半の発達は遅れが目立つが、2~3歳にかけて大きく伸び、5歳頃までに一般児の平均に収束していくこと、学童期以降に明らかになる発達上の問題等もあることから長期的なフォローアップが必要であること、保護者は、特に発達初期において育児不安や育児困難感をもちやすいため保護者支援が重要であること、などが明らかにされた。</p> <p>【応用例、研究の展望】</p> <p>極低出生体重児が入園している保育園に対して全国的な調査を行ったところ、入園している極低出生体重児の約半数近くが乳児期から入所していること、極低出生体重児は、成長・発達の遅れから個別対応が必要とされていること等が明らかにされた。その調査から約20年が経過しており、現在はもっと多くの割合の極低出生体重児が保育園入園している可能性があるため、それらの子どもたちの保育園生活の現状と課題等を明らかにするとともに支援のあり方を検討する必要があると考えている。</p> <p>【研究方法の特色】</p> <p>フォローアップ研究</p>	
本研究関連特許・論文等	<p>・小野鈴奈・安藤朗子「極低出生体重児とその保護者を対象とした親子プログラムの取り組み—多職種による退院後の早期支援の中での保育士の役割—」医療と保育 18(181)、p.18-31、2020年</p> <p>・安藤朗子「極低出生体重児のフォローアップから」子育て支援と心理臨床 12、p.52-56 2016年</p>	
共同研究・外部機関との連携への期待	<p>・</p> <p>・</p>	